木工研究会 木の椅子講習会

開催日時:2015 年 11 月 14 日(土)午後1時 30 分から 5 時まで

会 場:松本市 長野県工業技術総合センター

参加者: 27 名　　報告者 松山ちえみ

講 師:島崎 信氏

テーマ:1 北欧(デンマーク)の木工事情について

2 木工家ウィークの椅子展について

3 君の椅子プロジェクトについて

4 高橋三太郎展について

ゲスト 井崎 正治氏

1 北欧(デンマーク)の木工事情

島崎氏は日本に北欧のデザインを紹介してきた第一人者である。

まずウェグナーの仕事を系統的に視覚化したデザインツリーを例に、デザインをするには根本になる古いデザイン(中国の古い椅子やウィンザー等)があり、それを元に自分のデザインを作り、それらのリデザインを繰り返していること。デンマークでも 30 年代以前はデザイナーがいたわけではなく、町の工場の職人が古いものをリデザインして作っていたことを説明。現在王立アカデミーで学ぶ人たちも修復学を主に学ぶ。ヨーロッパでは修復は日常で、モダン建築をやる人も修復学は2年間学ぶ。勉強の基礎は過去のことを学ぶことが重要で、そこから同時代(現在)のものができている。日本ではあまりそういった考えがなく島崎氏が以前「家具の病院」を作ったときも大手の家具会社がひややかに見ていたが、今ではそういった会社も修理を受けるようになって来た。愛着を持つ生活は心地よいものである。デザインする人、製作する人、販売する人、使う人が繋がることでいい商品が出来る。デザイントアートとの違いはここにあり、アートは一人で完結しているが、デザインが技術や用途と繋がり、時代に添っている。ただ、グローバルを追い求め過ぎると均一化してしまう。そこにローカルが加わって個性が生まれる。その両方が必要である。日本のメーカーには世の中に良い商品を出し育てて行く能力を努力がたりないと思う。

デンマークの木工作家は国内の人口が 500 万人とマーケットが小さいこともあり、工房をかまえて一年を通して家具の製作で生計を立てている人はほぼいない。家具の仕事のない時は建築系の仕事をしたりしている。2年前に国連ビルのリニューアルにともない、フィン・ユールがデザインした会議場を 60 年前の状態に戻す事にした時もデンマークでの椅子の製作ができなかった。300 脚以上の椅子を作れる職人がおらず、結局日本で作る事になった。それ以来フィン・ユールの椅子は日本で作っている。ヤコブセンの家具もポーランドへ製作地が移っている。1980 年前後の頃にはウェグナーがいるから若いデザイナーの道が開けないとウェグナーの作品を破壊するなどのデモが起こったこともある。ヨーロッパから見れば日本の状況は珍しいし、うらやましい事である。

デンマークと日本の関係は 1880 年頃のジャポニズムの流行（ウィーンの万国博覧会）に始まる。それまでデンマークには伝統的なデザインはあまり存在していなかった。日本のデザインが近代以後のデンマークのデザインに大きな影響を与えていると言える。造形のポテンシャルは日本のほうが持っている。昔の日本の生活の中から出て来た造形や技術がデンマークの近代デザインにどのように影響してきたかを分析・研究することが、今後我々が家具を造る上でどうしていったらよいかと言う事に繋がって行くと思う。

2　木工家ウィークの椅子展について

過去何回かの木工家ウィークの椅子展を見てきて、今後の取り組む方向性として思う事は「複眼の思想」もって作ることが必要と思われる。椅子のデザインをするのにいろいろなタイプがあって良いと思う。無垢の木たけでなく、成形合板等の新しい技術や金属や布等の異素材などを取り入れること。また、作り手としての考えのみでなく、使い手の心をもってデザイン、製作して行く事が要求されるのではないか。

そこで今後のテーマとして「自分の為の椅子」はどうか。たとえば高齢になって思うのが和室で使用できる膝にやさしい椅子が欲しいと思っている。使い手という目線で作った椅子展はどうだろうか。

3　君の椅子プロジェクトについて

自治体が予算を計上して、その年の新生児に町内の木工家に依頼して製作をした木製椅子を贈る取り組み。北海道の東川町、剣淵町、愛別町、東神楽町、中川町で行われていて、今年から長野県の売木村が加わった。

このプロジェクトの発想に衝撃をうけて勝手に応援してきた。全国各地で展示会をしているが、今年は 10 年目の記念展を「札幌芸術の森」で行った。その年毎にデザインは更新された1種類で、長野県からも谷進一郎さん、三谷龍二さん、出光晋さんがデザインを担当している。

2015 年から材料となった北海道産のミズナラの木のプロフィールが付くようになっている。北海道大学の演習林の木を使用しているが、今、東川町に「君の椅子の森」を作って植林を開始しており、100 年後の使用を目指している。

4　高橋三太郎展について

高橋氏は北海道の公共建築の中の椅子を多く手がけておられ、今回の展示は 40 年近い活動の回顧展になっている。展示のしかたがとても良く、自分の椅子のデザインのルーツを明確にしてその流れが解るような展示がされていた。これは勇気のいる事で、元になったデザインのパクリだといわれかねない。しかし古いものを勉強、吸収して自分のデザインをして行くというのが本当であり、重要なことである。明確に自分の意志を伝えること（説明の文章も2m くらい離れても読めるような大きさの文字で作品を見ながら同時に読むには5行くらいが適当）が、使い手に購入してもらう為には必要である。作り手の発想でない展示を心がけることが大事ではないか。

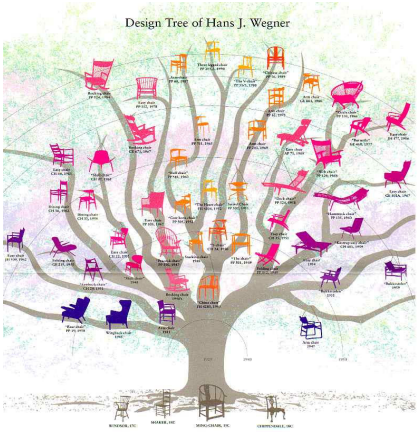
◎井崎正治さんの工房の夏合宿

愛知県蒲郡市にある井崎さんの工房で行われた夏合宿のお話をお聞きした。５日間の日程で参加者は９名。井崎さんの工房にはふいご場があり、そこで刃物をつくる講習が行われた。参加者がそれぞれ切出しや丸鑿などを製作している様子を拝見した。

島崎さんがこの様子をご覧になり、蒲郡に学校を作ってはどうかと提案されていた。ある程度経験のある人にそれ以上へ進む突破口を作るような学校。専門の柱を一本もっている人が、それ以外の事に関心をもち教養を広げられるような学校を作りたいとおっしゃっていた。

講演する島崎信さん

ウェグナーのデザインツリー



フィン・ユールの UN チェア（1951/2012 日本製）

木工家ウィークの椅子展　2015

君の椅子 10 年展

高橋三太郎展